資料４

平成27年9月　臨時常任委員会議員発言要旨

日時：平成27年9月3日（木）

No.	分類	発言要旨
1	文化財	先日先哲史料館を訪問したが、すばらしい展示や説明がなされていた。先哲を教育に活かす能動的な動機付けの部分、自ら学ぶ姿勢のきっかけづくりをするという意味での先哲の記載が必要。先哲は子どもたちや教員にとっても、教材やきっかけづくりの重要な部分となる。 下関市教育委員会は教育の基本方針に、教員や保護者だけでなく地域にとっても一言でわかりやすいキャッチコピーを使い、一体となって盛り上げていこうとしている。 県下の教職員が同じ意識で取り組んでいけば先哲の話、地域の資源、文化財や特産品も含めて活用できるのではないかと思うので参考にしてもらいたい。
2	高校教育	グローバル化や多極化の進展ということは別にして、特に周辺地域は少子化によって生徒数が減っている。周辺地域で高校教育における質の確保をしていくことが、今後１０年間を見据えた上で大切な取組となる。 例えば、現状では重点支援校は4クラス以上必要といった様々な縛りがある。こういったことについて少しずつ考え、対応する必要があると考えるが、県長計、教育長計も含め、今後どういった方向で進めていくつもりなのか。
3		県内の高校を視察して色々な形の高校ができていることを知ったが、例えば由布高校の観光コースや玖珠美山高校の総合のような、地域の特性を活かした特色ある高校学校づくりについての記述を充実させるべきではないか。
4	不登校対策	国は不登校対策として、各県にフリースクールを設置する方針であるという報道があったが、県はどのように考え方ているのか。また民間を含め設置についての相談があった場合どういった対応を考えているのか。
5	芸術教育	美術館の新見館長は『キュレーターの極上芸術案内』という本の中で、「多様性をもっと活かしながら人づくり等々にも美術館を活用してもらいたい」と述べられており、そういった館長の想いもあり、全県の小学生を招待したのではないか。また、「大分県民が面白い県民に生まれ変わるぐらいのきっかけづくりの場にしてもらいたい」とも述べられている。 ところが、招待された小学生の反応を聞くと、とにかくおとなしくするよう指導されているようで、多様性とは逆に画一的な指導となっているようだ。美術館を多様な面白い大分県民をつくるきっかけづくりにするという視点は、長計にどのように表現されているのか。 いじめ・不登校とも関係するが、障がい者教育等を含めて、岡山県の盲学校の校長を勇退した方がすばらしい講演を行ったとの記事を見た。そういった方を招いて話を聞きそれを長計に組み込むと良い教育ができるのではないか。

平成27年第3回定例会 文教警察委員会議員発言要旨

日時：平成27年10月1日（木）

No.	分類	発言要旨
1	特別支援教育	長期教育計画（素案）には、計画の基本理念から施策の総合的推進のために必要な視点として、6頁にインクルーシブ教育システムの構築の必要性について記述しているが、具体の施策である19～20頁の「Ⅰ（6）特別支援教育の充実」からは、そういった方向性があまり見えてこない。 20頁上段の＜特別支援学校＞の一番下に「地域の要請に応えるセンター的機能の強化」とあるが、これはどちらかというとインテグレーション、統合教育に必要な機能であり、これを高めることは良いが、特別支援学校の専門性と通常学校のインクルージョンの理解とを合わせたインクルーシブ教育を目指していくことが重要。このためには、例えば10頁の「豊かな心の育成」の中にインクルージョンへの理解と啓発といった内容を盛り込む等、特別支援学校において専門性を高めて多様性に応えるための授業を実施するとともに、通常学校にも理解を求めていかなければならない。それをどこかで調和することが大切。このような視点が19～20頁の「特別支援教育の充実」からは見えてこない。 また、社会への完全な参加を目指す権利条約だが、市町村の成人式において、みんな仲間で祝い合えるような環境をつくってもらいたい。残念ながら現状では支援学校の子どもたちは別々に参加している。そういうインクルージョンの世界を築くために新しい計画に期待している。 通常学校に通う特別な支援が必要でない子どもたちにどのように教えていくかが大事。
2	読書	子どもの不読率が高いのは、子どもたちが読みたい本が少ないからではないか。私は市職員だったので学校の図書館を見て歩いたことがあるが、1万冊ぐらい蔵書があっても8割以上が昔の本で、新しい情報がなかなか入っていないように感じた。 まずは子どもたちが読みたい本を準備する必要があるのではないか。それには予算が関係することもよく分かるが、一つは県立図書館や市立図書館との連携をいかに深めるか、技術的な問題があるかもしれないが、子どもたちに本を読めというばかりでなく、読みたくなる環境づくりも大切。
3	不登校	不登校には家庭事情など様々な状況や理由があり、不登校の子どもに対して現場の教職員にできることは、家庭と力を合わせて復帰させることだと思う。それを考えると「Ⅲ（2）不登校対策の充実・強化」の目標指標は、復帰率・出現率の両方を設定するべきではないか。 また、30頁の主な取組に学校復帰に向けた関係団体との連携強化と記載しているが、今後10年間を考えると、フリースクールなど関係機関や団体との連携がこれまで以上に求められると思うので、しっかり取り組んでいって欲しい。
4	家庭教育	いじめ等の対策や深夜外出等の様々なことは家庭が一番基礎になる。学校教育を進めていく上でも、家庭教育の充実を図っていくことが重要。
5		子どもを育てるのは学校と地域と家庭だとずっと言われてきた。以前県が提唱していた「早寝早起き朝ご飯運動」は相当効果があったと思う。子どもたちが夜遅くまで起きており、朝ご飯も食べないで登校するというような、一番基本的なところができていないということで、教育委員会主導でひとつの運動として取り組んでいたが、最近はほとんど取組の様子が聞こえてこない。 新しい計画の中では、学力などの学校教育だけでなく、家庭教育も重要視してもらいたい。
6	文化財	文化財について、新聞で大友公園が日本最大級の大名庭園と報道されていた。美術館は県と市とでまったく異なるコンセプトで建てられたものだが、今回の埋蔵文化財センターの移転の関係と大友公園の整備の関係でなにか良いものに結びつけるような形ができないか考えて欲しい。
7	その他	下関市教育委員会では、「人との出会いによって子どもは変容する、感動することによって子どもは成長する、様々な体験をすることによって自分自身の将来の夢を子どもたちは描き始める、自分の夢へ挑戦する子どもたちを魅力ある教育の中で育てていきたい」という考えの下、教育委員会の基本方針を「いのちきらめき 未来を拓く 下関の教育」とし、サブタイトルに「行きたい学校、帰りたい家庭、大好きなふるさと」を掲げている。 大分県の学校は今、行きたい学校になっているか、子どもたちが家に帰りたいと思う家庭を一緒につくっているか、大好きなふるさと大分になっているか、このようなことを意識して、今回の教育長計の見直しを進めてほしい。また、校長としての覚悟はあるか、校長としての哲学はあるか、校長として職員に一体何を語っているのか、その校長に問いかける県教委には同じように覚悟はあるのか、哲学はあるのか、市教委の職員にどう伝えようとしているのか、こういったことを問いかけながら、取り組んでもらいたい。